井上義朗著

市場経済学の源流

マーシャル、ケインズ、ヒックス

中公新書

1121

中公新書 1121

井上義朗著

市場経済学の源流

マーシャル、ケインズ、ヒックス

中央公論社刊

井上義朗（いのうえ・よしお）

1962年（昭和37年）千葉県に生まれる．
1984年，千葉大学人文学部卒業．
1991年，京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了，京都大学経済学博士．現在，千葉大学法経学部専任講師．専攻，現代経済理論，近代経済学史．
著書『「後期」ヒックス研究—市場理論と経験主義—』（日本評論社，1991年）

市場経済学の源流
中公新書 *1121*
©1993年
検印廃止

1993年3月25日初版
1993年4月25日再版

著　者　井上義朗
発行者　嶋中鵬二

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋2-8-7
振替東京2-34

Printed in Japan
ISBN4-12-101121-X

はしがき

「市場」とはなにか？　「市場経済」とはいかなる経済か？　経済学において、この最も基礎的で中心的な「概念」が、いま改めて問い直されている。こうした問いが、昨今の計画経済の矢継ぎ早の崩壊から市場経済への移行、あるいは市場経済圏における経済摩擦の深刻化という状況のなかで、一般世論の中から出されてくること自体はきわめて自然なことといえる。ところが、日頃経済学を学んでいる者であっても、いざ面と向かって「市場」とはなにか？　と問いただされると、案外答に困るのではないだろうか。無論、「市場とは、需要と供給を均衡させる機能一般のことをいう……」という類の答は可能であるし、またそう答えて誤りというわけでもない。しかし、そう答えた瞬間、何かいい足りない、何かが欠けている、少なくとも、本質を突いているという実感がない、と思うことがあるのは、必ずしも筆者ひとりではないのではなかろうか。

本書は、こうした素朴な疑問を梃子に、近代経済学における「市場把握」の仕方について、その足跡を整理するという形を採りながら、現代市場認識としていかなる観点が必要になってきて

いるかを検討してみたものである。もとより、筆者の能力からして、近代経済学派のすべてに検討を加えることなど到底不可能であるし、また適当とも考えない。本来落とすことのできない論者であっても、以下の方針に照らしてその多くを割愛した。その結果、本書にはジェボンズも出てこなければ、ハイエクすら出てこない。彼らを欠いてもなお、論ずるべき多くの考え方、捉え方があると思うからである。

そこで、本書ではまず、現代の主流派、すなわち新古典派経済学における市場把握を、その源流に立ち戻って考察することから始めたいと思う。すなわち、イギリス新古典派経済学の祖、アルフレッド・マーシャルにおける市場把握を、筆者なりの観点から再検討してみる。筆者の見る限り、新古典派経済学の原像における市場把握は、今日われわれの知るものとはむしろ対照的に、すこぶる動態的な性質を備えたものとなっており、それは今日なお活かしうる、あるいは活かすべき内容のものである。しかしながら、一九世紀後半のイギリス経済を前提とするマーシャル経済学は、それ相応の歴史的制約を当然受けており、この制約を克服しながら、いかにしてマーシャル的経済観を継承してゆくかが、仮に自覚されていなくとも、その後の経済学におけるひとつの大きな課題であったといえる。

ここで道が二つに分かれる。一つは、マーシャル的な市場経済観、あるいは経済学方法論を、マーシャルとは異なる歴史的前提の上に再構築してゆく道であり、いま一つは、マーシャル理論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

の成果をそのまま受け継ぎ、そこにさらに論理的な精緻化を施してゆく道である。やや誤解を招きやすい言葉かもしれないが、前者を「直観の継承」、後者を「形式の継承」と呼ぶことにすれば、「直観の継承」を真になしえたのがケインズであり、他方マーシャル理論を、ケインズ以上に、マーシャルに忠実に受け継いだと思われている現代の新古典派は、ある意味で「形式の継承」を行なっていたといえる。それは直接には、パレート、ロビンズ、サムエルソン、そして本書で取り上げるヒックスなどに代表されるであろう。

ケインズをマーシャルの継承者と呼ぶことには、多くの反論が予想される。筆者とて、ケインズ「理論」が、マーシャル「理論」に対する「革命」であったことを相対化するつもりは毛頭ない。しかし、経済学としての方法論、あるいは経済に対する探究の姿勢を真に継承してゆくと、経済の基礎構造の変化を受けて、理論内容としては、著しく異なるものへ転換してゆかざるを得なくなるということが起こりうるのではないか、そして、そうした転換を遂げた存在は、往々にして異端者の烙印を押されることになるのではないか。これはまったくの私論であるが、マーシャルとケインズとの関係には、この種のものがあったように思われてならないのである。本書では、その転換の基軸をイギリスにおける中心的企業形態の変容に求めながら、ケインズが、マーシャルの持っていた動態的経済観をいかなる形で継承していたかについても論じてみたいと思う。

さて、「直観の継承」が「革命」につながる要素を有する一方で、「形式の継承」はその語感に

反して、「変貌」につながる要素を有すると思う。ヒックス、サムエルソンなどによるマーシャル市場理論とワルラス一般均衡体系との融合は、近代経済学における基本的市場観を確立するに至ったが、それは本質的に静態的な性格のものであった。市場＝資源配分機構とする市場認識の確立は、経済学の分析技術としての側面を飛躍的に発展させた一方、同時に経済理論から歴史的要素を追放する過程でもあった。現在の状況も、良かれ悪しかれ、そこから大きく変わってはいない。

しかしながら、筆者はここで、ヒックスという存在に特別の注意を払ってみたい。経済学徒が通常抱いているヒックス像からするとやや意外なことに、ヒックスは、こうした経済学における歴史の喪失に対し少なからず危惧の念を抱き続け、遂には、いまや経済学徒の共有財産である彼の「前期」の業績に対して、ほとんど訣別に近い姿勢を採るようになっていった。つまり、われわれはここに、「後期」ヒックスという別個の問題があることを知るのである。そして、ヒックスの残した文献を検討してみるに、彼の変貌は、彼の「市場」に対する認識の変化に対応しており、それは、市場把握における「歴史」の復活を目指したものであると同時に、またある意味で、新古典派の原像への回帰でもあった。

こうしてヒックスは、その「前期」における比較的サムエルソンに近かった位置から、「後期」においては、サムエルソンとは対極的な位置にあるカレツキやガルブレイスの市場認識に近づい

ていったのである。しかし、その変貌の過程は同時に、ケインズと同様、ヒックスを現代の異端へと導く過程でもあった。本書では、彼の理論がたどった経緯を振り返りながら、ヒックスにおける、動態的市場経済の論理というものを、簡潔に再現してみたいと思う。

動態的な市場経済の理論は、いわば現在の最先端の議論である。しかしながら、市場経済の本質を、その「自発的動態性」に求めようという姿勢は、近・現代経済学の歴史における一方の縦軸をなしてきたものでもあるのである。本書が、その足跡と現代へ通じる問題をどれだけ摘出できたかは、読者諸氏の判断に待つほかはないが、市場経済再考のためのひとつのきっかけを探る試みとして、以下の議論を展開してみたいと思う（なお本書の第II章は、『千葉大学経済研究』第六巻第二号に掲載された拙稿に加筆・修正を加えたものである）。

本書はしたがって、コンパクトな教科書・解説書を目指したものではない。すでに定説化しているはずの諸議論に自分の問題意識をぶつけてみた、まったくの解釈試論にすぎない。このような無謀に近い企てを一冊の書物とすることができたのは、ひとえに中央公論社の早川幸彦氏のおかげである。氏の叱咤と激励に改めてお礼を申しのべたい。

一九九三年一月

井上義朗

目次

はしがき

プロローグ　シュンペーターからの出発 …… 3
——新古典派の原像へ

1　経済学における市場把握の二類型　4
はじめに　新古典派経済学とは何か　近代経済学史上の「新」古典派　今日の新古典派における市場認識

2　シュンペーターからの出発　17
シュンペーターの動態把握　シュンペーターへのささやかな疑問　新古典派経済学の原像へ

I　新古典派経済学の原像(1) …… 29
——マーシャルの市場把握

1　マーシャルの市場理論(1)　30
マーシャル理論の思想的背景　四つの時間区分
「短期」の市場過程
2　マーシャルの市場理論(2)　45
長期均衡論の含意　市場間関係論への発展
3　同時代における類似の経済思想　57
ヤング＝カルドアによる継承　意外な理解者？　ヴェブレン

II　新古典派経済学の原像(2)……71

――自由貿易論と企業論

1　はじめに　72
マーシャルの二大課題　政策としての自由貿易論と前提条件
2　アメリカ旅行の影響　77
アメリカから学んだもの　もうひとつの「マーシャルのジレンマ」

3　マーシャルにおける基本的企業像　84
一九世紀末英国の経済・企業事情　『原理』における基本的企業像　企業形態と理論の関係　企業形態と思想の関係
4　マーシャルの株式会社論　99
マーシャルの株式会社観　マーシャルの歴史的限界
5　マーシャルからケインズへ　106

III

ケインズと市場経済

——株式会社の時代におけるマーシャルの「直観」の継承者　111
1　ケインズにおける株式会社　112
はじめに　二〇世紀経済思想としてのケインズ
ケインズと株式会社　証券市場の不安定性
2　ケインズ的市場世界の基本的動態性　129
『一般理論』の基本構造　流動性選好説の今日的な重要性　ケインズにおける動態化論理　ケインズ理論の可能性

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

IV ヒックスの動態的市場観 ……143

——ワルラスの「形式」からマーシャル、ケインズの「直観」へ

1 ヒックスについて 144

ヒックス経済学の多面性

2 ヒックスにおけるマーシャルの継承 148

理論継承の二類型　「前期」ヒックスにおけるマーシャルの継承

3 ヒックスの動学方法 153

ヒックス動学の分類

4 『価値と資本』における動態 156

VCモデルの基本概念　VCモデルの展開　VCモデルへの疑問

5 ヒックスによる自発的動学の試み 166

「後期」ヒックス　ストック均衡とフロー均衡

固定価格モデルの展開

6　VCモデルとどこが違うか　174
「予想」概念の決定的変化
7　終わりに　178
自発的動態性と二〇世紀的人間像
あとがきにかえて　182
参考文献　191

市場経済学の源流

――マーシャル、ケインズ、ヒックス

プロローグ　シュンペーターからの出発

――新古典派の原像へ

1　経済学における市場把握の二類型

はじめに

異端の経済学者ジョーン・ロビンソンは、かつて、「市場」と題した一文に次のような文言を残していた。

「近代産業社会の経済学は、アダム・スミスの次の格言から始まった。『分業の程度は市場の広さに依存する』。……（中略）……アダム・スミスは、いわゆる規模の経済性と技術革新とを区別していなかったが、彼は、分業が、市場の成長と相まって、機械化を促してゆくであろうことを見抜いていた」。（「市場」）

「さて、アダム・スミスから一〇〇年、現実は彼の予想した通りになったが、経済学における関心の中心は、成長と技術進歩の問題から、代替的用途間における所与の資源の配分という問題に移行していた。そしてその時以来、市場という概念は、供給と需要の均衡という図式で語られるようになった」。（同上）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com